

化学物質過敏症一時転地住宅（旭川市）でのこれまでの経験と今後

なかいさとし

中井里史(横浜国立大学大学院環境情報研究院) 柳沢幸雄(東京大学大学院新領域創成科学研究科)
石川 哲 (北里研究所病院臨床環境医学センター) 石川睦男 (旭川医科大学産婦人科学講座)
山口 昭 ((株)冬総合研究所) 斉藤 晶 (斉藤牧場) 横田克巳 (化学物質過敏症支援センター)
菅原功一 (旭川市)

【はじめに】

旭川市に建てられた化学物質過敏症一時転地住宅での療養が 2002 年 6 月から開始された。2003 年 1 月末現在でのべ 5 名の患者が療養を開始し、現在に至っている。この間、患者の生活面や住宅内の環境面で予期せぬ事態が生じてこれらへの対応に迫られることがあるなど、よりよい療養を行うための課題はまだ多く残されているが、おおむね順調にスタートできたと考えている。ここでは、入居開始以降に生じた様々な出来事を整理し、今後の一時転地住宅での療養・研究を確固たるものにしていくためとともに、今後各地に建設されることが期待される療養型施設のための基礎的資料を呈することとする。

【これまでの経緯】

2002 年 5 月まで 定期的に室内環境測定を継続 (アルデヒド、VOC、温湿度) また何らかの問題が生じた際にはただちに臨時測定等の対応を実施。入居規則や、生活サポート体制などの整備 (問題点 : 慢性的な水不足)

2002 年 6 月 最初の療養患者 (2 名) 入居 (問題点 : 患者間の人間関係、夏期のカビ汚染)

2002 年 9 月 患者 (2 名) 入居 (問題点 : 患者自身による化学物質の持ち込み、汚染物質の除去)

2002 年 12 月 患者 (1 名) 入居、現在に至る。

【考察】

住宅内外の空気汚染濃度はホルムアルデヒド、VOC とともに十分低い。また入居時、さらには退居された患者からは、住宅に対する印象は概ね良好であると報告されている。しかし現段階ではまだ中途退去者が多いのも事実である。今後ともに環境管理をしていくとともに、上記に示したような課題を一つずつ解決していく必要がある。また低い汚染物質濃度であるにもかかわらず、患者は種々の反応を示すこともあることから、汚染物質濃度と症状発生等との関係などに関してさらなる検討も必要である。